

FGO／スカサハ「バニー奴隷堕ち」完全版

目次

- 第1話「ギャンブルの特異点」
- 第2話「聖杯ポーカー」
- 第3話「バニー奴隷契約」
- 第4話「初夜——前戯と、初めての敗北」
- 第5話「調教二日目——アナル開発と、二重の責め」
- 第6話「調教一週間——アナル挿入と、女王の騎乗」
- 第7話「調教二週間——口の奉仕、騎乗、そしてシャワー」
- 第8話「調教一か月——二つの穴と、最後の奉仕」
- 第9話「再戦の提案」
- 第10話「勝負手」
- 第11話「敗北の後に——三度の降伏」
- 第12話「アフター——昼の完璧なバニーガール」
- 第13話「アフター——夜のバニー奴隷（END）」
- アフター第1話「VIPルームの記念日」
- アフター第2話「調教成果の確認」
- アフター第3話「女王から進んで」

第1話「ギャンブルの特異点」

その特異点に、まともな通貨は存在しなかった。

街の名を、享楽特異点カジノポリス。聖杯の影響で歪められたその都では、パンを買うにも、水を飲むにも、宿を取るにも、すべてに「勝負」が義務づけられていた。コインを投げ、ダイスを振り、カードを引く。勝てば得られ、負ければ奪われる。財産も、身分も、ときには命さえも、チップに換算されてテーブルの上を流れていく。街の中心にそびえる巨大カジノ、その最上階に君臨するオーナーこそが、聖杯を握るこの特異点の支配者だった。

特異点の修復のため、スカサハは単身で潜入した。カルデアのマスターには後方待機を命じ、自身は一人の旅の賭博師として街に入った。影の国の女王、数千年の時を生きた戦士にとって、人間同士の勝負事は児戯に等しいはずだった。

実際、最初はそうだった。

ダイスの目は、投げ手の指の癖で読める。ルーレットの偏りは、盤の僅かな傾きと球の跳ね方で見抜ける。カードの勝負では、相手の瞳孔の開きと指先の震えが、手札の強さを雄弁に語った。スカサハは静かに、しかし確実に勝ち続けた。宿代を稼ぎ、食事を得て、カジノの上階フロアへの入場権を勝ち取り、一夜のうちに「赤い目の女賭博師」の噂は街中に広まった。



だが彼女の目的は小銭ではない。最上階、オーナーの私室。聖杯はそこにある。正面から挑むには、オーナー自身に「勝負する価値のある相手」と認めさせなければならない。彼女はあえて大勝負を続け、わざと目立った。やがて深夜、黒服の男が彼女の前に現れ、恭しく頭を下げた。

「オーナーが呼びです。最上階のプライベートルームへ、どうぞ」

スカサハは微笑んだ。罠に誘うつもりが、誘われる形になった。だが構わない。テーブルに着きさえすれば、後は勝つだけだ。

——このときの彼女は、まだ知らなかった。そのテーブルが、彼女の数千年の誇りを砕く場所になることを。

第2話「聖杯ポーカー」

最上階の私室は、街の喧騒が嘘のように静かだった。厚い絨毯、革張りの椅子、窓の外には特異点の夜景。テーブルの中央に置かれた黄金の杯が、ランプの光を受けて鈍く輝いていた。聖杯。本物だ。彼女の赤い瞳が僅かに細められる。

テーブルの向こうに座る男、カジノオーナーのクロードは、整った顔に余裕の笑みを浮かべていた。

「噂の賭博師は、美しい女性だったとはね。私はクロード、この街のすべてを管理している。……さて、君の目的は分かっている。その聖杯だろう」

「話が早くて助かる。どうすれば、渡してもらえる」

「単純な勝負をしよう。ポーカーだ。私の賭け金は聖杯と、この街の支配権。君の賭け金は——君自身だ。負ければ君は私の所有物となる。どうだね、不公平ではなかろう」

スカサハは即答した。「いいだろう」。数千年、彼女は戦場で命を賭けてきた。勝負の席で臆することなど、あり得ない。

ゲームは深夜まで続いた。序盤、彼女の読みは冴えていた。クロードのブラフを二度見破り、チップの山は彼女の側に積み上がった。だが中盤から、流れが変わる。男には「癖」がなかった。強い手でも弱い手でも、表情も、指先も、呼吸さえも寸分狂わない。情報のない相手に、彼女の洞察は空を切った。逆に男は、彼女の勝負所での僅かな癖——強い手のとき、左手の小指が一度だけ動く——を、正確に読み切っていた。

そして最終局面。彼女の手に残ったのは、フルハウス。十分に勝てる手だった。彼女は全額を賭けた。男は静かにカードを開いた。

「ロイヤルストレートフラッシュ。……君の負けだ、女王陛下」



あり得ない確率の手が、テーブルの上に揃っていた。イカサマの証拠は、どこにもない。完全な、実力による敗北。スカサハはしばらく沈黙し、やがて小さく息を吐いて、潔く認めた。

「……負けは負けだ。契約通り、私はお前のものだ。ただし、勝負に背く真似はするな。私も約束は守る」

「素晴らしい。では明日から、君の新しい生活を始めよう」

男の笑みが、深くなった。

第3話「バニー奴隷契約」

翌朝、スカサハの新しい「制服」が用意された。

黒光りするバニーレオタード。兎の耳のカチューシャ。蝶ネクタイに白いカフス。網タイツとハイヒール。そして契約書には、こう書かれていた。

——昼はカジノのバニーガールとして接客に従事すること。夜はオーナー個人の奴隷として、その命に服すること。期間は一か月。その対価の件は、期間満了後に改めて協議する。

「……ふざけた格好だ」

「よく似合っているよ、スカサハ。それに契約は契約だ。君は約束を守る女だろう？」

数千年生きた戦士が、あろうことか兎の扮装でホールに立たされた。客の視線が、剥き出しの肩、胸元、網タイツの脚に容赦なく注がれる。羞恥で頬が熱くなるのを感じながら、それでも彼女は完璧に接客した。グラスの運び方、笑顔、会釈。何事も極めるのが戦士の性だった。ホールでは「あの気品のあるバニーは誰だ」と客同士が囁き合い、一日で店の看板と化した。



だが彼女のプライドは、腕を組んでオーナーを見上げる姿に残っていた。接客の合間、監視に来たクロードと目が合うたび、彼女は真っ赤な瞳で睨みつけた。

「服従の真似事はしてやる。だが、私の心までお前のものになったと思うな。戦士の誇りは、こんな格好では売らん」

「ああ、分かっている。……誇りは夜、ゆっくり崩させてもらうよ」

「何だと」

クロードは笑うだけだった。その日の営業が終わり、閉店後の静まり返ったホールに、彼女を呼ぶ声が響いた。

「スカサハ。夜の部だ。私の部屋に来なさい」

彼女の長い夜が、始まろうとしていた。

第4話「初夜——前戯と、初めての敗北」

ペントハウスの寝室。街の灯りが窓の外で瞬いていた。クロードはソファに腰掛け、ワイングラスを傾けながら言った。

「契約通り、夜は君のすべてが私のものだ。……来なさい」

スカサハは立ったまま動かなかった。「命令される謂れはない。契約は身体の奉仕であって、心まで明け渡す約束ではない」

「結構。抵抗するなら、力づくでいただくまでだ」

彼の手が伸び、彼女の腕を掴んだ。戦士の反射で振り払おうとした力は、聖杯に近いこの部屋の結界と、契約の縛りによって鈍らされていた。抵抗虚しく、彼女の身体はベッドに押し倒された。レオタードの前が乱暴に捲られ、豊かな乳房が零れ落ちた。戦士の身体など、彼はまるで自分の庭のように知っていた。太い指が下腹を撫で、股間の布をずらし、敏感な場所を的確に探り当てた。

「や、めろ……っ！　そこに触るな……んっ」

「触るなど言いながら、もう濡れているじゃないか。誇り高い女王の身体は、正直だ」

彼の指は焦らした。核心の周りを円く撫で、浅く出入りし、彼女が腰を浮かせかけた瞬間に離れる。寸止めの責めに三度晒されたとき、彼女の口から悲鳴に近い喘ぎが漏れた。四度目、彼の指が深く沈み、内側の弱点を正確に擦り上げた。彼女の背が弓なりに反り、太腿が震えた。



「いや……だめ、だ……私が、こんなことで……ああっ……！」

抵抗の言葉を置き去りにして、彼女は指だけで最初の絶頂を迎えた。愛液が彼の手首を濡らし、彼女は荒い息をつきながら、天井を見上げた。数千年生きた戦士が、男の指に屈した。その事実が、彼女の誇りに最初の亀裂を入れた。



だが夜はまだ始まったばかりだった。余韻に震える彼女の両手首を、彼は片手で頭上に押さえつけた。

「本番はこれからだ。初めては、君の『いつもの場所』をもらおう」

彼の怒張が、濡れそぼった入り口にあてがわれ、ゆっくりと、しかし逃げ場なく沈み込んでいった。数千年、男に組み敷かれたことなどなかった身体が、初めての侵入に悲鳴を上げた。



「くっ、ああっ……！ この、程度で……私は屈し、など……！」

睨みつける赤い瞳。しかし深く、重い抽送が始まると、彼女の身体は彼の形を覚えていった。奥を突くたび内壁が締め付け、腰が勝手に迎えに行く。先ほど指で絶頂させられた身体は過敏になっていて、快感の波はすぐに高まった。クロードは彼女の弱点の角度を正確に突き続けた。

「ほら、またイキそうだ。身体はもう、私のものだと言っている」

「ち、がう……これは、私では、な……ああっ！」

否定の言葉は、絶頂の波に吞まれて消えた。身体が大きく跳ね上がり、彼女は初めて男の腕の中で果てた。目の端に涙を浮かべ、荒い息をつく女王の顔は、もはや戦士のもものではなかった。



「……覚えて、いろ。今日の屈辱は……必ず」

掠れた声の宣言に、彼は満足げに笑い、彼女の汗ばんだ額の髪を撫でた。「ああ、覚えているといい。明日はもっと深い場所を、教えてあげるからね」

第5話「調教二日目——アナル開発と、二重の責め」

二日目の夜。昼の接客を完璧にこなしたスカサハは、閉店後、再びペントハウスに呼ばれた。昨夜の余韻で身体の芯はまだ疼いていたが、彼女はそれを顔に出さなかった。

「昨夜の場所は、私の形を覚えたようだね。今日は、もう一つの場所を仕込む」

「もう一つ……？」

彼が取り出したのは、潤滑剤と、段階的に太さの違うシリコンのプラグだった。スカサハの顔色が変わった。

「ま、待て。そこは……戦士でも、女でも、使う場所では、ない……！」

「今夜からは、使う場所だよ」

彼女はベッドの上で四つん這いにさせられた。レオタードをずらされ、晒された後ろの蕾に、冷たい潤滑剤がたっぷりと塗り込まれる。太い指が、入り口の括約筋を円を描くようにほぐし、やがて第一関節まで、ゆっくりと沈んだ。



「んぐっ……！　ぬ、抜け……気持ちの、悪い……」

「力を抜いて、スカサハ。ほら、ほぐれてきた」

指は一本から二本へ。丁寧に、しかし容赦なく解されていく。異物感に彼女はシーツを噛んで震えた。やがて一番細いプラグが根元まで埋め込まれた。圧迫感と背徳の熱が交じり合い、彼女は声を上げた。

「ああっ……！　だめ、だ……そんなところで、私が感じるはず……！」

言葉を否定するように、プラグの刺激だけで彼女の身体は小さく絶頂した。理性が大きく削られた音がした。



だが調教は終わらなかった。クロードはプラグを入れたまま、彼女の身体を四つん這いの姿勢で固定し、空いた手の指を、今度は前に伸ばした。昨夜馴らされた前側は、触れる前から濡れていた。

「後ろを満たしたまま、前も責めるとどうなるか。試してみよう」

「や、やめろ……両方なんて、正気じゃ……ああっ！」

前への指の出入りが、壁越しにプラグを押し動かした。二重の圧迫と刺激に、彼女の腰が碎けるように揺れた。後ろの異物感と前の快感が混ざり合い、脳が処理を諦めた。彼女は頭を振り、涙を零しながら、しかし腰を彼の手に擦りつけていた。



絶頂は、前と後ろの両方から同時に訪れた。全身を激しく痙攣させ、彼女はベッドに崩れ落ちた。クロードはプラグを抜かず、彼女の耳元で囁いた。



「いい調子だ。一週間もすれば、プラグなしでは落ち着かない身体になる。……本物を入れる日が楽しみだね、女王陛下」

第6話「調教一週間——アナル挿入と、女王の騎乗」

一週間が過ぎた。

昼のスカサハは、相変わらず完璧なバニーガールだった。だが、その完璧さの裏側は大きく変わっていた。クロードの命令により、彼女は接客中も小さなプラグを後ろに仕込まれるようになったのだ。客に微笑み、グラスを運び、優雅に会釈する。その間ずっと、体内の奥で異物が疼き続ける。階段を上るたび、腰を捻るたび、プラグが内壁を擦り、彼女は笑顔の下で密かに息を詰めた。

ホールでクロードの姿を見かけるたび、プラグの周りがきゅっと締まった。見るな、意識するなと頭で命じても、身体は正直だった。常連客に「今日はなんだか色っぽいね」と囁かれ、彼女は愛想笑いの裏で奥歯を噛んだ。——この身体は、飼い主の姿に反応するように調律されつつあった。

夜の開発も着実に進んだ。指は三本を受け入れ、プラグは太さを増し、潤滑と拡張の手順は彼女の身体に「夜の儀式」として刻まれた。クロードは焦らなかった。戦士の身体を、戦場ではなく快楽で攻略する。その手際は、正確で、執拗で、逃げ場がなかった。

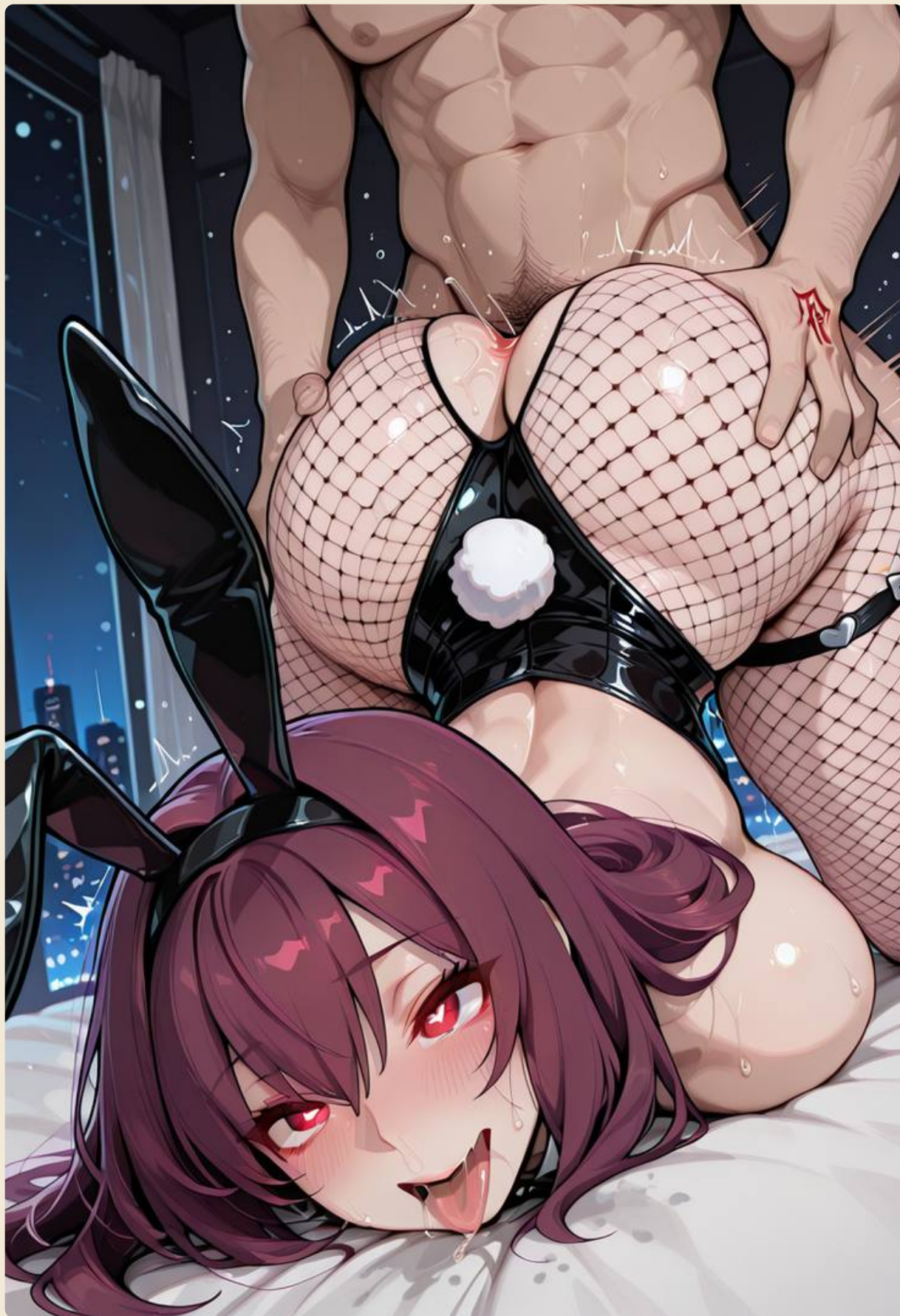
そして七日目の夜。彼はいつものプラグを彼女の後ろからゆっくりと抜き取り、言った。

「準備は十分だ。今夜は、本物を入れる」

その言葉に、彼女の喉が鳴った。恐怖か。それとも、認めたくない、もう一つの感情か。自分でも分からなかった。彼女はベッドに這い上がり、自ら腰を高く差し出した。空虚になった蕾が疼き、彼の熱い怒張が押し当てられる。第一関節。第二関節。蕾が限界まで押し広げられ、灼けるような圧迫感とともに、彼の楔が彼女の未開の奥へと沈み込んでいった。前とはまるで違う。内臓を直接撫で上げられるような、逃げ場のない感覚。深く入った状態で彼が腰を小刻みに揺らすと、彼女の背中が大きく反り、声が漏れた。



抽送が始まると、快感は痛みを追い越した。後ろの穴が彼の形を覚え、迎え入れるように蠕動する。彼女はシーツを掴み、額を押しつけ、数千年の戦士らしからぬ声で鳴いた。やがて彼は最奥で熱を放ち、彼女の後ろを自分のもので満たした。



だが、その夜の仕上げは、まだ先だった。余韻冷めやらぬ彼女を、彼は仰向けの自分の上へと導いた。

「今度は、自分で動いて落としてごらん。後ろで、私の上に」

「……っ、そんな、こと……」

羞恥に顔を染めながら、彼女は彼の怒張を自らの後ろに導いた。ゆっくりと腰を落とすと、開発され尽くした蕾は彼を根元まで飲み込んだ。自重で深く入る感覚に、彼女の口から甘い悲鳴が漏れた。彼の両手が彼女の腰を支え、リズムを教える。やがて彼女の腰は、教えられた通りの角度で、自ら動き始めた。豊かな乳房が大きく揺れ、バニーの耳が跳ねた。



「見るな……こんな姿を……」

「いい眺めだ。女王が後ろで私を咥えて、自分から腰を振っている」

彼の手が彼女の胸に伸び、露わな乳首を転がした。二重の刺激に、彼女は頭を大きくのけぞらせ、後ろだけで激しく果てた。膝が震え、身体が彼の胸に崩れ落ちる。荒い息の合間、スカサハは気づいてしまった。——身体が、次を求めて疼いていることに。



第7話「調教二週間——口の奉仕、騎乗、そしてシャワー」

二週間が経過した頃、スカサハの日常は静かに変質していた。

接客中、視界の端にクロードの姿が入るだけで、下腹部に熱が灯る。夜、彼の部屋へ続く廊下を歩く自分の足取りが、どこか急いでいることに気づき、彼女は壁に拳を押しつけて立ち止まった。弟子たちに「心を制せ」と説いてきた女王が、自らの心の敗北を日々目撃していた。

その夜、呼ばれた彼女を待っていたのは、新しい命令だった。

「今夜は、口で奉仕しなさい。女王陛下の口が、私のためにあることを教えてあげる」

「……っ、好きに、なれと言うのか」

反抗的な言葉とは裏腹に、彼女は彼の前に跪いた。チャックが下り、晒された怒張に、彼女の喉が鳴る。両手で支え、まず先端に唇を寄せ、舌を這わせた。裏筋、鈴口、竿の根元。彼の反応を見ながら、彼女の舌は的確に悦ぶ場所を辿っていった。戦士の学習能力は、こんな場所でも発揮された。深く咥え込み、喉の奥で締め付け、上目遣いに彼を見上げる。その姿はもはや、命じられた奉仕の域を超えていた。

彼が彼女の頭に手を置き、緩やかに律動を導くと、彼女は従順に頭を動かした。じゅぷ、じゅぷと水音が静かな部屋に響く。鈴口から溢れる先走りを舌で掬い、彼女は小さく喉を鳴らした。——美味しい、と身体が言っていた。



限界を迎えた彼が彼女の頭を掴み、最奥で放った。熱い奔流が喉を直撃し、彼女は目を見開いた。だが吐き出すことはしなかった。彼の手をそっと押さえ、こく、こくと喉を鳴らして、すべてを飲み下した。そして名残惜しげに竿を舐め清め、口の中を見せるように開いて見せた。

「……ごちそうさま、でした。ご主人様」



言ってから、自分で驚いた。ご主人様。その呼び方が、抵抗なく喉から出た。

その夜の後半、彼はご褒美のように彼女を抱いた。彼女は自ら彼の上に跨り、レオタードを開き、腰を落とした。頭で命じるより先に、腰が悦ぶ角度を探って動く。



彼の両手が彼女の手を包み、指を絡めた。繋いだ手に縋るように頭をのけぞらせ、彼女は果てた。絶頂の瞬間、彼女の口から零れたのは小さな一言だった。「……もっと」



だが今夜は、それでも終わらなかった。汗に濡れた身体を、彼はバスルームへと連れた。

「汗を流そう。……ついでに、続きもな」

湯気の立ち込めるシャワーの下、彼女の身体からバニーの衣装が剥がされた。濡れた長い髪が肌に張り付き、湯が絶頂の汗を洗い流す。壁に掌をつかされ、後ろから再び貫かれた。



水の音と喘ぎがタイルに反響する。湯気の中で、彼女はもう抵抗の言葉すら思い出せなかった。彼の腕に全体重を預け、水しぶきとともに果てた。



第8話「調教一か月——二つの穴と、最後の奉仕」

一か月が経った。

驚くべきことに、スカサハの外見上の態度は初日とほとんど変わらなかった。接客は完璧、口調は尊大、オーナーへの視線は反抗的。従業員たちは「あのバニーはまだ馴れていない」と噂した。だが真実は、夜が証明していた。

「ふん、今日も下らん命令か。……さっさと終わらせろ」

そう言い放つ彼女の股間は、部屋に入った時点で既に濡れていた。後ろの穴は期待に小さくひくついていた。言葉と身体の乖離は、もはや彼女自身にも制御できなかった。

今夜、最初の調教は二つの穴の同時責めだった。仰向けに倒され、彼の楔が前を深く貫く。同時に太いプラグが後ろにねじ込まれ、二重に満たされる感覚が彼女の理性を飽和させた。前後の壁越しに互いを感じ合う圧迫感。深く突かれるたび、プラグが連動して奥を擦る。



「やっ……ああっ！ 両方、なんて……私の身体、もう、どうにかなって……！」

彼の腰が最奥を強く叩いた瞬間、彼女の両脚は彼の腰に固く巻き付き、二度と離れまいとした。身体は完全に彼のものだった。激しい絶頂が彼女を貫き、意識が白く霞んだ。



だが、今夜はそれで終わらなかった。余韻に震える彼女を彼は四つん這いにさせ、プラグをゆっくりと抜き取った。空虚にひくつく蕾を見て、彼は笑った。

「後ろが寂しがっているじゃないか。今夜はこっちが本番だ」

「ま、待て……今、いったばかりで……敏感に、なって……！」

訴えは届かなかった。絶頂直後で過敏になった後ろに、彼の怒張が根元まで沈み込んだ。開発され尽くした蕾は、もう抵抗らしい抵抗もなく彼を受け入れ、締め付けた。腰を掴まれ、深く、重く突かれるたび、先ほどの絶頂の残り火が再び燃え上がる。彼女はシーツに顔を埋め、声を殺そうとしたが、やがて耐えきれず大きく鳴いた。



「ああっ……！ 後ろ、だけで……また、イって、しまう……！」

最奥で放たれた熱が後ろを満たし、彼女は二度目の絶頂に身体を痙攣させた。



そして最後の仕上げに、彼は彼女をベッドの端に跪かせた。後ろには新しいプラグが戻され、満たされたままの状態、彼女は口での奉仕を命じられた。

「締めくくりだ。後ろを気持ちよくしたまま、口でも私を果てさせてごらん」

彼女は頷き、両手で彼の怒張を支え、深く咥えた。後ろの圧迫感が快感の底上げをし、口の動きは次第に熱を帯びた。上目遣いに彼を見上げ、喉奥で締め付ける。



やがて彼が彼女の頭を掴み、口の最奥で三度目の熱を放った。彼女は目を細め、喉を鳴らして、すべてを飲み下した。後ろのプラグが、満足げに小さく震えた。



絶頂の痙攣が収まった後、涙目の彼女に、クロードは穏やかな声で言った。

「一か月、よく仕えた。約束通り、対価を払おう。……明日、もう一度だけ勝負をしてあげる」

その夜、スカサハは眠れなかった。自由と聖杯。本来、彼女がこの街に来た目的そのものだったはずなのに、胸の奥がざわついて落ち着かなかった。

第9話「再戦の提案」

翌日、カジノは臨時休業となった。最上階の私室には、再びポーカーテーブルが用意され、中央には聖杯が置かれていた。昼の光の中で見える黄金の杯は、彼女の数千年の戦いの、あまりに安い報酬に見えた。

クロードは対面に座り、条件を告げた。

「一か月の奉仕の対価だ。勝負をやり直そう。ルールは前回と同じポーカー。君が勝てば、奴隷の身分から解放し、この聖杯を渡す。カルデアに帰るも自由だ。そして、負けても何も変わらない。今のまま、私のバニーでいればいい」

破格だった。負けても失うものは、何ひとつない。勝てばすべてを取り戻せる。断る理由が存在しない条件に、スカサハは一瞬、言葉を失った。

「……なぜ、そんな条件を出す」

「面白いからさ。自由を目の前にした君が、どんな顔で戦うのか見てみたい」

彼女はカードに手を伸ばした。戦士として、これは受けるべき勝負だった。理性はそう言った。だが指先が微かに震えた。本来あり得ない震えだった。昨夜のざわつきが、まだ胸に残っていた。自由を取り戻した自分を想像したとき、真っ先に浮かんだのは安堵ではなかった。——あの夜々が、終わってしまう。その事実への、喪失感に似た痛みだった。

彼女はその痛みを誤魔化すように、強く言い放った。

「いいだろう。今度こそ負けん。お前の聖杯も、自由も、すべてもらう」

「頼もしいね。では始めよう、女王陛下」

配られたカードを、彼女はゆっくりとめくった。特異点の運命と、彼女の誇りを懸けた二度目の勝負が静かに幕を開けた。彼女は、まだ知らなかった。この勝負の本当の敵は、向かいの男ではないということに。



第10話「勝負手」

勝負は、静かに、しかし確実に進んだ。

序盤は互角だった。クロードの読みの深さは相変わらずだったが、スカサハも一か月の間に、テーブル越しに彼の呼吸と癖を学んでいた。小さな勝ちと負けを繰り返し、チップの山は拮抗した。彼の小指の動き。呼吸の間。まばたきの回数。彼女の観察眼は、夜のベッドの上ではなく、勝負の席でこそ冴え渡るはずだった。

だが、彼女の額には汗があった。おかしい、と彼女は思った。戦場でも緊張などしたことのない自分が、なぜこれほど汗ばむのか。勝ち進めるほどに、胸のざわつきが大きくなっていくことにも気づいていた。勝つことは、終わることだった。

そして、運命の配牌が来た。

ゆっくりとめくった彼女の手の中に、それは揃っていた。間違いなく勝てる手。場の状況、残りのカード、男のチップ量、すべてを計算しても、この手でコールすれば彼女の勝利は確定する。あとは一言、「コール」と言うだけ。

——その瞬間、彼女の脳裏を、一か月の日々が奔流のように駆け抜けた。

初夜の屈辱。プラグの圧迫感。後ろを開発される夜の羞恥。彼の喉奥で果てさせた夜。彼の上で自分から腰を振った夜。両方の穴を満たされて果てた夜。与えられ続けた快楽。彼の手の温もり。絶頂のたびに見上げた、満足げな笑み。

コールと言え、あれらすべてが終わる。自由が戻る。聖杯が手に入る。元のスカサハに戻る。

なのに――。

快楽に染まった身体が、拒んだ。口が開かなかった。言葉が喉に張り付いて出てこなかった。彼女の指が震え、勝負手のカードを、一枚、また一枚と、静かに伏せていった。

「……フォールド、だ」



掠れた声だった。テーブルに、彼女の敗北が確定した。向かいで、クロードがゆっくりと顔を上げた。その目には、すべてを見通したような、深い愉悦の色があった。

第11話「敗北の後に——三度の降伏」

「ははははは！」

クロードの笑い声が、私室に響き渡った。

「見たぞ、スカサハ！ 今の手は、勝っていた！ わざと降りたな！ 自由も聖杯も捨てて、私のバニーでいることを選んだ！ 数千年生きた女王が、一本のチンポに勝てなかったとはな！ お前はもう、戦士ではない。ただのメスだ！」

彼女は何も言い返せなかった。事実だったからだ。否定の材料を探す理性が、もう身体のどこにも残っていなかった。彼は彼女の腕を掴み、そのままカードとチップの散らばるポーカーテーブルの上に押し倒した。彼女の胸が冷たいフェルトに押しつけられ、レオタードが乱暴にずらされる。前を捲られ、後ろを晒され、抵抗らしい抵抗もなく、彼女は彼の怒張を深く受け入れた。



「ああっ……！ ご、ご主人様……」

テーブルが軋み、チップが床に零れ落ちた。あざ笑われながら貫かれる屈辱の中で、彼女はついに、媚びた口調で本音を述べた。もう隠す理由がなかった。

「違う、違うのです、ご主人様……私の身体が、ご主人様の与えてくださる快樂に、勝てなかったのです……。勝負手を見たとき、私の身体が『コール』を拒んだのです。自由も、聖杯も、いりません。私は……ご主人様のバニーのままでいたい……！」

「はは、よく言えた。では、バニーとして最初の務めだ。今の気持ちのまま、ここでイけ」

深く、重い衝撃が繰り返され、テーブルの上で彼女は大きく果てた。最奥で放たれた精液を、彼女は歓喜とともに受け入れる。絶頂に溶け切った顔で内側が精を吸い上げ、結合部から白濁が溢れてテーブルのフェルトを汚した。自由を自ら捨てた女の顔は、なぜか穏やかで、満たされていた。



だが、彼女の降伏はまだ終わっていなかった。

寝室へ運ばれる途中、彼女は彼の袖を掴んで引き止め、その場に跪いた。バニー耳を垂らし、両手で彼の怒張を恭しく支え、媚びた瞳で見上げた。

「ご主人様、お願いします……この口でも、もう一度、私をご主人様のものであることを、確かめさせてください……」

自ら先端に唇を寄せ、舌を這わせ、深く咥え込んだ。先ほど中に出されたばかりの彼のものを、彼女は愛おしげに舐め清め、喉奥で締め付けた。彼の手が頭に置かれると、彼女は嬉しそうに目を細め、自ら頭を動かした。



やがて彼が彼女の口の中で二度目の熱を放つと、彼女は喉を鳴らしてすべてを飲み下し、口を開いて空になった舌を見せた。

「……ん、ごちそうさまでした。私の口も、お腹も、全部ご主人様のものです」



そして寝室。ベッドに移された彼女は、今度は自ら彼にしがみついた。両脚を彼の腰に固く絡め、首に腕を回し、耳元で何度も懇願した。

「ご主人様、お願いします、もう一度……私を、ご主人様のものだと、身体に教えてください……離さないで、ずっと奥にいてください……」

数千年の女王の、媚び切った懇願だった。彼は笑って応えた。向かい合い、深く結ばれ、彼女は二度目の交わりを自分のものとして受け入れた。



深く突かれるたび、彼女は「ご主人様、ご主人様」と繰り返し、やがて全身を震わせて絶頂した。最奥で三度目の熱が放たれたとき、彼女は彼の背中に爪を立て、幸せそうに微笑んだ。



「ありがとうございます……私、もう戻れません。戻りたくも、ありません……」
そこに残ったのは、快楽に染まった目で主人のチンポを待つ、一匹のメスウサギだった。

第12話「アフター——昼の完璧なバニーガール」

あの勝負から、さらに時が流れた。

昼のカジノホールで、スカサハは今、誰もが認める完璧なバニーガールだった。彼女の接客は芸術の域に達していた。客の好みの銘柄を一度で覚え、グラスの温度、注ぐ速度、微笑む角度。すべてが計算され、すべてが自然だった。彼女がホールに立つ日は売上が跳ね上がり、遠方から「伝説のバニー」に会いに来る客さえ現れた。

「オーナーのところのバニーは、気品が違う」と常連は言った。「あれは元はどこかの女王だったんじゃないか」と。

噂は正しい。だが客の誰も知らなかった。その高潔なバニーが、自分の意思で自由を捨てたこと。そして今、心から満たされていることを。

ある昼下がり、ホールの監視に来たクロードと目が合い、彼女は人目を盗んで小さく、媚を含んだ微笑みを送った。数千年の戦士の矜持は、もう彼女を縛っていなかった。昼の完璧な接客は、主人への忠誠の表明そのものだった。すべての客の前で最も美しく振る舞うことが、オーナーの所有物としての新しい誇りだった。

閉店時間が近づく。最後の客を見送り、グラスを磨き上げ、彼女はホールの中央で深くお辞儀をした。

「本日もご来店、ありがとうございました」

やがて日が落ち、カジノの灯りが夜の色に変わる。彼女の耳が、ペントハウスへ続くエレベーターの到着音を捉えた。網タイツの下で、彼女の後ろが小さく疼いた。昼の顔が終わり、夜の顔の時間が来たのだ。



第13話「アフター——夜のバニー奴隷（END）」

夜、ペントハウスの扉が閉まれば、スカサハは至上の忠誠と愛を捧げる、オーナーだけのバニー奴隷に戻る。

今夜も彼女は、扉が閉まるなり彼の胸に身を寄せた。「ご主人様、今日も私を、たくさん使ってくださいね」。媚びた声の懇願に、彼は満足げに彼女の顎を上げ、深く口づけた。

まず彼は、彼女を大きな窓際に立たせた。特異点の夜景を背に、ガラスに彼女の掌と乳房を押しつけ、後ろから深く貫いた。街の灯りが眼下に瞬き、行き交う人々の頭上で、伝説のバニーが鳴かされる。ガラスが彼女の吐息で白く曇り、腰を叩く音と、抑えきれない喘ぎが部屋に響いた。彼の手が前に回り、敏感な場所を同時に撚る。二重の刺激に、彼女の膝が震えた。



「ああっ……見られて、いるみたいで……ご主人様、もっと、もっと奥まで……！」

やがて彼は彼女をベッドに運び、今度は彼女が自ら跨った。今夜の彼女に、命じられる必要はもうなかった。レオタードを捲り、彼の怒張を自らの手で導き、ゆっくりと腰を落とす。数え切れない夜を経て完成された身体は、彼を根元まで易々と飲み込み、最も悦ぶ角度を自ら探って動き始めた。豊かな乳房が彼の顔の前で揺れ、彼の両手はその乳房を掴み、露わな乳首を転がした。



「ご主人様……大好きです。私はご主人様のバニーです。ずっと、ずっと……」

愛の言葉を繰り返しながら、彼女は頭をのけぞらせて絶頂した。最奥で放たれた熱を受け止め、内側が歓喜に締め付ける。汗と愛液と精液にまみれ、彼女はとろけた顔で主人を見上げた。





そして、すべての行為が終わった後。彼女の奉仕には、最後の務めがあった。

「ご主人様、最後のお掃除をいたしますね……」

媚びた笑顔でベッドの下に跪き、彼の巨根を両手で恭しく支える。さんざん彼女を犯したその怒張は、精液と愛液で白く汚れていた。彼女は愛おしげに顔を寄せ、舌を這わせた。竿筋を下から上へ、鈴口の周りを丁寧に、そして根本まで。一滴の精も、一筋の愛液も残さぬよう、時間をかけて舐め取っていく。ハートに溶けた真紅の瞳が、恭順に見上げていた。



すべてを飲み込み、最後に小さな口づけを落として、彼女は満ち足りた微笑みを浮かべた。

「ん……全部、きれいになりました。ご主人様、今夜も私を使ってください、ありがとうございました」

影の国の女王は死んだ。カジノの夜に飼い慣らされ、主人に愛され、主人を愛する、幸せなメスウサギがそこにいた。

——END——

アフター第1話「VIPルームの記念日」

あの再戦から、ちょうど一か月が経った夜のこと。

閉店後のカジノで、クロードは最上階のVIPルームにスカサハを呼んだ。シャンパンの栓が抜かれ、二つのグラスが満たされる。今日は「契約記念日」なのだという。

「一か月前、君はここで私のバニーになった。その記念だ」

「……ふふ。奴隷にされた記念日を祝うとは、悪趣味ですね、ご主人様」

言葉とは裏腹に、彼女の瞳は嬉しそうに揺れていた。グラスを掲げ、彼女は彼の隣ではなく、真向かいに跪いた。レオタードの前を自ら捲り、露わになった乳房を彼の視線に晒しながら、恭しく頭を下げる。

「では記念日に、最初の奉仕を。ご主人様のバニーから、心を込めて」

彼女の口が、彼の怒張をゆっくりと咥え込んだ。シャンパンの冷たさが残る唇と、熱い舌。裏筋を丁寧に辿り、鈴口を舌先で転がし、深く、深く飲み込んでいく。彼の手が彼女の頭に置かれると、彼女は目を細め、自ら律動を速めた。一か月の調教で完成された口の技術は、熟練の愛人のそれだった。水音が静かなVIPルームに響き、時折、彼女の喉が小さく鳴る。



やがて彼が彼女の頭を掴み、口の最奥で熱を放った。彼女は逃げず、喉を鳴らしてすべてを飲み下す。口を離し、開いて見せた舌の上は空っぽで、彼女は媚びた笑みを浮かべた。

「ごちそうさまでした。……記念日の味は、格別です」



彼は彼女を引き上げ、革張りのソファへ押し倒した。向かい合い、彼女の両脚が彼の腰に絡む。レオタードは捲られたまま、豊かな乳房が彼の胸に押し潰され、露わな乳首が擦れ合った。深く沈み込むたび、彼女は彼の首に腕を回し、耳元で甘く鳴いた。

「ああっ……ご主人様、好きです……私をバニーにしてくださって、ありがとうございます……」

感謝の言葉とともに腰がうねり、彼女は自ら深さを求めた。グラスの中で泡が弾ける音と、彼女の喘ぎだけが部屋を満たした。



彼の律動が強まり、彼女の身体が大きく反った。両脚が固く巻き付き、内側が歓喜に締め付ける。最奥で放たれた熱を受け止め、彼女はとろけ切った顔で主人を見上げた。ハートに染まった瞳、零れる涎、崩れた表情。そのすべてが、一か月前の女王への、完璧な答えだった。



「これからも毎年、祝ってあげるよ。君が私のバニーでいる限りね」

「はい……ずっと、ずっと先まで、お願いしますね」

アフター第2話「調教成果の確認」

ある夜、クロードは言った。

「今夜は、仕上がりの確認だ。あれだけ仕込んだ身体が、どれほど正直になったか、見せてごらん」

ペントハウスのベッド。彼女は言われるままに四つん這いになった。後ろの蕾に慣れた手順でプラグが埋め込まれ、彼の指が前に伸びる。一か月の調教と、その後の夜の積み重ねで完成された身体は、触れる前から濡れそぼっていた。前への指の出入りが壁越しにプラグを押し動かし、二重の圧迫が彼女の理性を溶かしていく。

「ああっ……だめ、です……確認なんて、言いながら……ご主人様、意地悪です……」

「ほら、もう腰が動いている。身体は正直だ、と何度も教えただろう」



彼の指が弱点を正確に擦り上げ、プラグが奥で震えた。彼女は頭を振り、バニーの耳を揺らし、しかし腰を彼の手擦りつけ続けた。絶頂はあっけなく訪れた。全身を痙攣させ、愛液を散らし、彼女はベッドに崩れた。瞳はハートに溶け、舌が小さく覗いていた。



「上出来だ。では本番の確認だ」

プラグがゆっくりと抜き取られ、空虚にひくつく蕾に、彼の怒張が押し当てられた。絶頂直後で過敏な後ろは、もう何の抵抗もなく彼を根元まで迎え入れた。腰を掴まれ、深く、重く突かれるたび、残り火が燃え上がり、彼女の声は次第に高くなった。露わな乳房が大きく揺れ、彼の手が前に回って敏感な場所を同時に撚る。三重の刺激に、彼女の意識は白く霞んだ。

「ご主人様、ご主人様……！　後ろ、気持ちいいです……私、もう、ご主人様なしでは……！」



最奥を強く叩かれ、彼女は大きくのけぞって果てた。後ろだけで迎える激しい絶頂に全身が跳ね、彼の熱が最奥に放たれるのを、内側の締め付けで迎えた。崩れ落ちた彼女の耳元で、彼は満足げに囁いた。



「合格だ、スカサハ。君の身体は、私のために完璧に仕上がっている」

「……はい。光栄です、ご主人様」

アフター第3話「女王から進んで」

その夜は、少しだけ違った。

ペントハウスの扉が閉まるなり、スカサハは彼の胸に身を寄せた。いつものように。だが今夜、彼女の手は彼のシャツのボタンを、自ら外し始めた。

「ご主人様。今夜は……私から、させてください」

「ほう？」

「ご主人様に仕込まれた身体、全部ご主人様のものです。だから今夜は、この身体で、ご主人様を気持ちよくしたいんです」

彼女は彼をベッドに座らせ、自ら跨った。レオタードを捲り、彼の怒張を自らの手で導き、ゆっくりと腰を落とす。完成された身体は彼を根元まで飲み込み、最も悦ぶ角度を、教えられた通りに自ら探って動き始めた。豊かな乳房が彼の顔の前で揺れ、彼女は自信に満ちた、艶のある笑みを浮かべた。数千年の女王が、一人の男を悦ばせるためだけに腰を使う。その姿には、もう一片の屈辱もなかった。



「どうですか、ご主人様……私の動き、気持ちいいですか……？」

「ああ、最高だ。……よく育った」

褒められた喜びに、彼女の腰が大ききうねった。頭をのけぞらせ、バニーの耳を跳ねさせ、彼女は自分から果てた。最奥で彼の熱を受け止め、内側が吸い上げる。とろけた顔で、彼女は彼の頬に手を添えた。



だが彼女の奉仕は、まだ終わらない。今度は彼が主導権を取り戻し、彼女を仰向けに倒した。向かい合い、深く結ばれ、長い口づけが繰り返される。彼女の両脚が彼の腰に固く絡み、二人の額が触れ合った。汗ばんだ肌と肌の間で、露わな乳房が押し潰され、乳首が擦れる。彼女は彼の背中に腕を回し、耳元で何度も囁いた。

「ご主人様、大好きです。私はご主人様のバニーで、本当に幸せです……」



彼の律動が最速になり、二人は同時に限界を迎えた。深い口づけの中で彼女は全身を震わせて果て、最奥で放たれた熱を、抱きしめる腕の力とともに受け止めた。快楽に瞳を潤ませ、涙の粒を浮かべた女王の顔は、愛されるメスの顔だった。



余韻の中、彼女は彼の胸に頬を寄せ、小さな声で言った。

「明日も、明後日も。私はずっと、ご主人様のバニーです」